

第115回例会は、昭和61年10月4日(土)5日間、木曾谷南部は、南木曽町閼の南木曽岳の裾野を一周し与川へぬける林道を中心に採集会が行われた。参加者は、当日の参加者も含めて、井波一雄、奥原弘人、千村清、中沢袈裟延、中村英夫、元島清人、伊藤文男、田中茂、幹事の楯誠治の9名であった。

夕方、伊勢屋さんの庭をみせていただいたり、岩風呂に入ったあと夕食、自己紹介しながら懇親を深めた。井波先生からは、シラタマホシクサの標本をみせていただきながら、茎がねじれていて、細くても丈夫にできている等の特徴をお聞きした。また、シラタマホシクサの産地である愛知県の葦毛湿原の様子などもパンフレットを使って説明していただいた。井波先生からはさらに精図について、先生の苦労話や、精図への意欲をお聞きすることができた。奥原先生からは、ムラサキボタンズル(白馬村)、ツキヌキソウ(菅平)、ヤチアザミとナンプアザミの中間種、ヒジリアザミを聖でみつけたこと、フジアザミとアズマヤマアザミの間種のトウヤマアザミのこと、ワタムキアザミが木曾の南部にみられること、スズカアザミは木曾では須原より南にあり、下伊那では駒ヶ根までであること、明日行くとくところには、ハリカガノアザミがみられることなどお聞きした。

木曾に1ヶ所しかみられない、ミカエリソウの標本を楯が数本持参したので、みんなで観察した。

5日(日)、当日参加者がみえたので、それぞれの車に乗って、長者畑林道に入るとリンドウ、スズカアザミ、ガンクビソウ、がまず目にとまった。しばらく上ったところで、長者畑川の川原に出る。海拔930Mここでは、ミヤマトサミズキ、ヤマシロギク、アブラガヤ、カワラハハコ、ヒメクグ、イヌノハナノヒゲ、がみられた。カワラハハコは雌株、雄株がはっきりと区別できた。林道の道すじには、ミヤマクマワラビ、ヒナウチワカエデ、サルトリイバラ、コミネカエデ、シナノザサ、イヌツゲがみられた。

長者山荘を過ぎて、海拔1000m近くのところでは、ネズミガヤ、アケボノソウ、イワガラミ、オオバセンキュウ、サンカクズル、オオバアサガラ、などが沢にみられた。長者畑川をさらに上流に進む。ハリカガノアザミをさがして時々沢に入ってみる。1050M～1100mの小さな沢に、ハリカガノアザミがみつ

け喜びも大きかった。奥原先生からさっそくその特徴について説明していただいた。葉裏に白綿毛がほとんどなく、総苞片の刺が特に顕著であること、また、枝が特に細長いものもある。葉裏に多少綿毛のあるものなど変化があることも話していただいた。よくみると総苞片の刺に刺のついたのもみられた。珍しいアザミだったので、写真にしたり、標本を採ったりした。その他に、ヒメクロモジ、オオガンクビソウ、コマヤマハッカがみられた。これと似たものにコウシンヤマハッカというものがあるがこれは、天竜川より東側に分布し、木曽山脈から木曾谷のものはコマヤマハッカであると奥原先生が説明して下さった。ウシノケグサ、ウダイカンバもみられた。与川峠の少し下あたりのところで床波高原への道と分かれるがそちらに少し入ってみると、コハクウンボク、アズマヤマアザミ、タムシバ、オノエナギ、イヌコリヤナギなどがみられた。コハクウンボクは木曾では上松まで分布するそうだ。またもとの道にもどり、与川へと向う。与川峠のすぐ下1120mのところの湿地で、ヒロハイヌノヒゲを採集した。与川峠1184mを下ると、マルバノキの紅葉があちこちにみられた。途中で、紅葉と花と実と全部そろった枝をみつけて、標本にしたり、写真に撮ったりした。しばらく奥市沢にそって下る。途中静岡県の業者がマルバノキを切っては、切り花用にしているのを見かけた。どうも盗木しているようだった。注意しなかっただけに今になって心が痛む。与川の向田地区へ出るためにもう一度小さな峠を登る。途中、ナメリ沢で、アサクラザンショウ、マツブサをみる。峠では、トネアザミ、イヌザクラ、メグスリノキ、アブラシバ、ヤマトキホコリ、をみる。少し下って、アズマヤマアザミ、アシボソヒゴクサ、ウシクグ、ガマ、ベニバナボロギク、ヒトツバカエデをみた。ミツデウラボシ、フクオウニガナをみることができた。しばらく下って、海拔800mの上川ダムで、ゲイトを開けて車を通す。ワタムキアザミをみることもできた。与川の白山神社でヒダアザミをさがしたがなかった。次の産地へ行く予定でしたが時間がなかったのでとりやめ、白山神社下の道路で記念写真を撮って解散とした。

シオガマギクがあったり、ハナショウブの花がみられたので、帰途、写真にすることができた。